

題目

AEONTOWAリサーチセンターにおける共育の体制構築について

著者

早稲田大学

永井祐二 岡田久典 中野健太郎 李洸昊 小野田弘士

1. 概要

AEONTOWAリサーチセンターは、イオン環境財団との共同研究により「イオンの里山」の構築を目指すと同時に、学生の教育体制の整備にも取り組んでいる。本センターでは、学生とイオングループの構成員（イオンピープル）が共に学ぶ仕組みを構築し、その参加学生を「AEONTOWA Students」と定義している。

「AEONTOWA Students」は、寄附講座や関連講座を通じて募集された学生を中心に、地域で活動するサークルや、自然・環境・生物保護を目的とする団体のメンバーも加わり構成される。彼らはAEONTOWAの理念に沿った活動や研究を提案し、それを実践するための支援を受けながら、教育と研究の相乗効果を図っている。

2. 実施内容

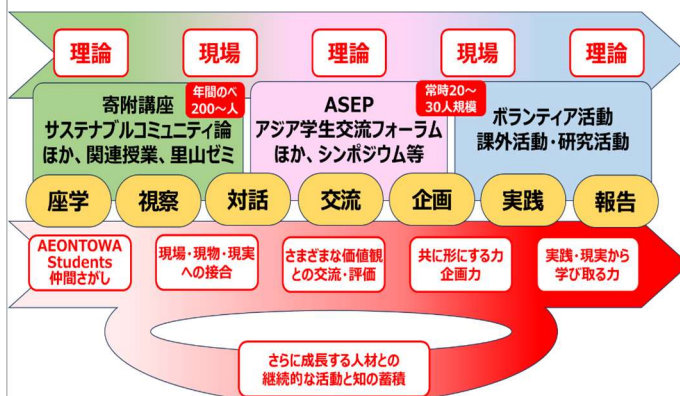
① 体制の構築

2023年度の報告では、AEONTOWAが寄附講座などを活用し、理論と実践の学びを組み合わせ「共育」の実現に取り組んでいることが示された。さらに、イオン環境財団が企画する国際交流事業やFuture Earthなどのシンポジウムへの参加機会を活用し、学生教育の枠組みを明確化。加えて、学生自身のサークル活動や研究を支援し、それをAEONTOWAの研究と結びつける仕組みを模索している。

本センターでは、研究に賛同する学生が集い、多様な現場・現物・現実に触れる機会を提供し、多角的な価値観に触れながら課題の抽出や企画提案を実践できる環境を整備し、学生はこれらの活動を通じて、実践的な学びを深め、自らの成長を実感しながら、将来の社会リーダーとして巣立つことが期待されている。特に重要視する点は、

- 学びのプロセスを通じて自身の問題意識を見出すこと
- 自分なりの活動を展開すること
- 将来に向けて志を同じくする仲間を見つけること

これらを促進するために、学生の自主ゼミ「里山ゼミ」を設置し、相互交流を深めるとともに、イオンピープルや先進的な実践者、行政担当者との勉強会を実施している。



② イオングループのリソースの活用

里山ゼミでは、イオングループの取り組みを深く理解するための「イオン業界セミナー」を企画。

イオングループの人事担当者を招き、業界理解を深める機会を提供するとともに、各社のイオンピープルを紹介し、社会貢献の仕組みを学ぶ場を設定した。

イオンの計らいで、卒業生が講師となり、学生が自身の未

来をよりリアルに想像しながら講義を受ける形式を採用。これにより、学生だけでなくイオンピープル自身も学びを深める機会となっている。

参加学生からは「グループ企業の多様な展開に大きな可能性を感じた」という声が多く寄せられた。

また、各社の事業構築の背景には社会貢献の精神や持続可能性への配慮があることに気づき、「単なる生計や出世のためではなく、社会を支えるために働くことの意義」を実感したとの報告があった。



③ 実績の報告

AEONTOWAリサーチセンターの活動は、毎年報告会で公表されている。2022・2023年度からは、研究者による報告に加え、授業や研究活動に参加した学生が発表するスタイルに変更。さらに本年度は、5年間の研究と学生活動の成果を冊子としてまとめ、ストーリー仕立てで考察を行った。

この冊子では、学生・イオンピープル・研究者・地域住民が多世代で取り組んだ成果を収録。里山の理想像に挑戦し、何を学び取ったのかを描いている。



3. 総括

「イオンの里山」とは、従来の「人が関わり資源を活用・育む森」という概念を拡張し、

- 地球環境の持続性（エネルギー・資源循環）
- 地域社会の持続性（社会インフラの維持・コミュニティ・福祉）
- 人と生活の持続性

これらを統合し、人間の営みを含めた持続可能な社会連関を描くものである。

学生の参加体制強化を中心に報告した本年度の取り組みでは、社会概念の構築は単に研究者や企業が考えるものではなく、学生や地域住民と共に学び、対話し、実践する中で形成されるものと認識。

こうした活動が、大学における新たな研究や社会における新しい価値創出へとつながることを目指している。

